

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第210集

秩父郡皆野町

宮地墓地遺跡

県道秩父児玉線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では21世紀に向けて「環境優先」、「生活重視」、「埼玉の新しい92（くに）づくり」の基本理念のもとに豊かな彩の国を目指しています。

快適で活力のある県民生活を支えるための基盤づくりの一環として、道路網整備も進められております。

道路網の整備については、県内1時間道路網構想にもとづいて、地域の連帯を高めるために行われております。県道秩父児玉線の整備もこれらの施策のうちのひとつです。

この路線が整備される皆野町は、秩父盆地の北東部に位置しています。皆野町には多くの貴重な遺跡が認められます。大背戸遺跡、駒形遺跡は縄文時代の敷石住居跡が多く発見され、早くから知られておりました。古墳時代の遺跡には、大塚古墳と金崎古墳群があり、埼玉県指定史跡となっております。また、中世より交通の要衝でもあり、高松城等の山城や館跡が多く残されています。

今回の道路整備予定地内においても、宮地墓地遺跡の所在が確認されておりました。

この埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることになりました。発掘調査につ

いては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、実施いたしました。

発掘調査の結果、近世の石垣で囲まれた平場と、それに関連する石組の溝が発見され、皆野町の近世史を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護に関する教育・普及の資料として、また、学術研究の基礎資料として、広く御活用いただければ幸いと存じます。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書の刊行にいたるまで御協力いただきました埼玉県土木部道路建設課、埼玉県熊谷土木事務所、皆野町教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成10年6月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県秩父郡皆野町に所在する宮地墓地遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

宮地墓地遺跡（略号 MYJ）
埼玉県秩父郡皆野町大字国神字宮地339-3 他
平成8年3月4日付け 教文第2-188号
3. 発掘調査は、県道秩父児玉線の建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち、発掘調査については富田和夫、栗岡潤が担当し、平成8年3月1日から平成8年3月31日まで実施した。整理報告書作成作業は西井幸雄が担当した。
5. 遺跡の基準点測量、および航空写真撮影は、朝日テクノに委託した。
6. 発掘調査時の遺構写真は、富田、栗岡が撮影した。遺物の写真撮影は西井が行った。
7. 出土品の整理及び図版の作成は西井が行った。本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、他を西井が行った。
8. 本書の編集は、西井があたった。
9. 本書にかかる資料は、平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、下記の方々よりご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
菊池伸之、皆野町教育委員会、

凡例

1. 遺跡全体図におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位の指示は、すべて座標北をあらわす。

2. 調査区内におけるグリッドは、座標値X=9.130、Y=-67.370を原点(2-7)とし、10m×10mの方形に設定した。呼称は、方眼の北西隅の杭名称を用いた。

3. 遺構、遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構…………… 1/40・1/80

遺物 縄文時代石器… 1/3

近世金属器… 1/2

ガラス玉…………… 1/1

古銭…………… 1/1

近世陶磁器類… 1/3

その他、遺跡位置図、周辺地形図、遺跡全体図などは、その都度スケールを示した。

4. 全体図等で使用した遺構の略称は以下のとおりである。

SD 溝

5. 断面図の土層番号は、ローマ数字が遺跡全体に通じる基本土層、アラビア数字が遺構個別の覆土を表す。

6. 文中の引用文献は巻末にその一覧を掲載した。

目次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	IV 遺構と遺物	9
1 調査にいたる経過	1	1 平場	9
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	2 石組溝	9
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	3 出土遺物	16
II 遺跡の立地と環境	4	V まとめ	19
III 遺跡の概要	8		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第8図 平場・石組溝拡大図(2)	12
第2図 周辺の遺跡	5	第9図 平場・石組溝拡大図(3)	13
第3図 遺跡周辺の地形	6	第10図 石組の側面図(1)	14
第4図 基本土層	8	第11図 石組の側面図(2)	15
第5図 全体図	8	第12図 出土遺物(1)	17
第6図 平場・石組溝	10	第13図 出土遺物(2)	18
第7図 平場・石組溝拡大図(1)	11	第14図 皆野町の戦国時代から近世の遺跡	20

図版目次

- 図版1 宮地墓地遺跡全景
図版2 宮地墓地遺跡全景
図版3 遺構全景
図版4上 第1号平場、第1号溝
 中 第1・3号平場
 下 溝コーナー、第1・2号平場
図版5上 第3号平場
 中 第1・2号溝、第1・2号平場
 下 第1号溝
図版6上 第1号溝止め石
 中 溝コーナー
 下 第2号溝
図版7 陶器（丸椀、箱湯呑、香炉、皿、花瓶）
図版8上 陶器（丸椀）
 下 陶器類（香炉、半胴他）
図版9上 皿
 下 焙烙
図版10上 鉄器
 下 石器

I 発掘調査の概要

1. 調査にいたる経過

埼玉県は関東地方の中西部に位置し、県全域が都心から100kmの圏内に含まれる。県は快適でうるおいのある生活空間の形成のために、道路網の整備を進めている。「圏内1時間道路網構想」を推進し、高速道路、地域高企画道路、インターチェンジにアクセスする道路、都市内街路などの、幹線道路から生活道路に至るまで、体系的な道路網の整備計画である。県道秩父児玉線の整備もこうした事業の一つである。

道路建設課から県道秩父児玉線の建設に先立ち、平成7年8月18日付け道建第146号で、文化財の所在及びその取扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課は、平成7年9月6日付け教文第584号で、概ね次のように回答をした。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
宮地墓地遺跡 (47-164)	墓地・寺院跡	中世	皆野町大字国 神字宮地

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、

事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官当への発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については当課と別途協議してください。

その後、道路建設課と文化財保護課との間で取扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であり、記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課・文化財保護課の三者で工事工程、調査計画・調査期間などについて協議し、平成8年3月1日～平成8年3月31日までの期間、発掘調査を実施することとした。

文化財保護法第57条3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に係わる通知は以下のとおりである。

平成8年3月4日付け 教文第2—188号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

宮地墓地遺跡の発掘調査は、平成8（1996）年3月1日から3月31日までの1ヶ月間にわたって実施した。

3月上旬 現地において、熊谷土木事務所担当者と当事業団担当者が、調査及び安全対策などに関して打ち合わせを行う。現場事務所の設置、器材等を搬入する。補助員の募集を行う。

重機によって表土の掘削を行った後、補助員による遺構の確認作業を開始する。基準点測量及び、方眼杭の設置を行う。

中旬 遺構の本格的な精査を行う。写真撮影を行った後、遺構の実測を開始する。

下旬 遺構の平面及び断面の実測を終了。地形図及び石垣の側面図を作成するため航空測量を実施する。調査を終了し、器材等を搬出し、現場事務所の撤去作業を行う。

整理・報告書刊行

報告書の作成作業は、平成10（1998）年4月1日から6月30日の3ヶ月間にわたって行った。

4月上旬に遺物の洗浄と注記を行い、4月中旬に遺物の接合・復元と遺構図面の第二原図を作成する。

現地で撮影した航空測量写真から図化した、石垣側面図の成果が納品される。

5月 月上旬に遺物の実測に入る。中旬以降遺構・遺物図面のトレースを行う。下旬に遺構・遺物図面のトレースを終了し、図版の版組を行う。遺物の写真撮影を行う。

6月 原稿の執筆に入る。版組みの細かい修正を行い、写真図版の版組みを行う。割付作業を完了。原稿執筆を終了し、入稿する。

7月 入稿後校正作業等を行い、9月に報告書を刊行する。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)発掘調査 (平成7年度)

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	吉 川 國 男
常務理事兼管理部長	新 井 秀 直
理事兼調査部長	小 川 良 祐
管 理 部	
庶 務 課 長	及 川 孝 之
主 査	市 川 有 三
主 任	長 滝 美 智 子
主 事	菊 池 久
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
調 査 部	
調 査 部 副 部 長	高 橋 一 夫
調 査 第 一 課 長	坂 野 和 信
主 任 調 査 員	富 田 和 夫
調 査 員	栗 岡 潤

(2)整理事業 (平成10年度)

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠 一 郎
常務理事兼管理部長	鈴 木 進
管 理 部	
庶 務 課 長	金 子 隆
主 査	田 中 裕 二
主 任	長 滝 美 智 子
主 任	腰 塚 雄 二
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久
資 料 部	
資 料 部 長	増 田 逸 朗
主幹兼資料部副部長	小 久 保 徹
専門調査員兼資料整理第一課長	坂 野 和 信
主 任 調 査 員	西 井 幸 雄

II 遺跡の立地と環境

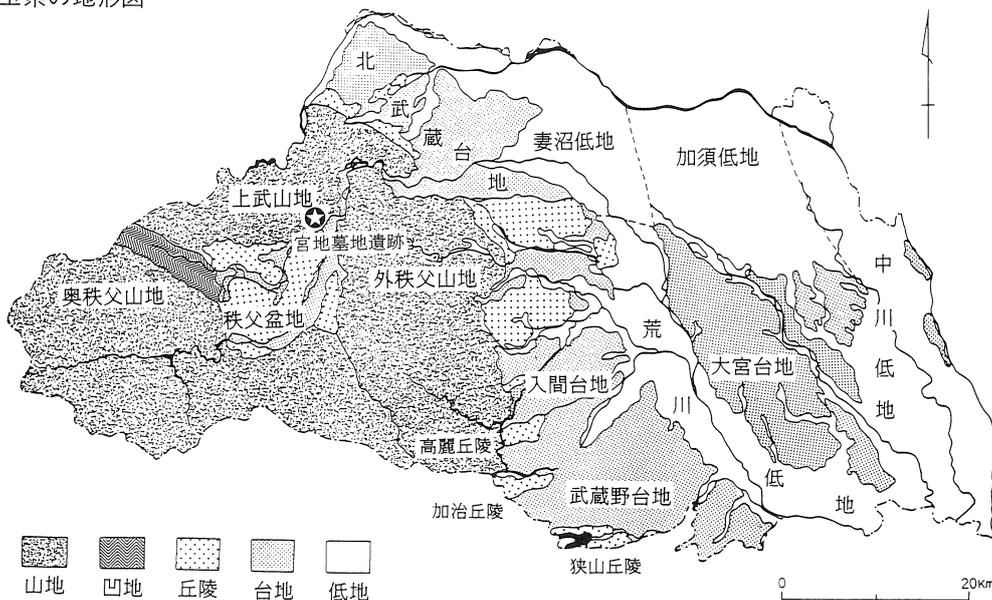
皆野町は埼玉県の北東部に位置し、東部を東秩父村、南部を秩父市、吉田町、西部は神泉村、北部は児玉町、長瀨町及び寄居町に接している。東西約15.2km、南北約7.3km、面積は約63.07km²である。町の地形は中央部が括れ、東西が蝶の翅を広げたように広がる、東西に細長い形状をしている。中央部を荒川が南東から北西に大きく蛇行し流れたおり、北部で三沢川、中央部で日野沢川、南部で赤平川が合流している。

遺跡の分布は、荒川の両岸に形成された河岸段丘が発達した中央部の皆野・国神地区、山地は西部の日野沢・金沢地区、東部の三沢地区の三つの地区に分けることができる。遺跡が密集するのは、宮地墓地遺跡が所在する皆野・国神地区である。

遺跡を時代ごとに概観すると、先土器時代は吉丸遺跡の細石器が学史的に著名であるが、石器は不定形なものが多く、現状では先土器時代に位置づけるのは難しいものと思われる。

縄文時代は、日野沢川上流の三角穴半洞窟から、早期と中期の土器・石器類と動物遺存体、人の部分骨が出土している。勝負沢岩陰遺跡からは、早期～中期の土器・石器類が見つかり、長期間にわたって、たびたび利用されていたことが伺える。

第1図 埼玉県の地形図



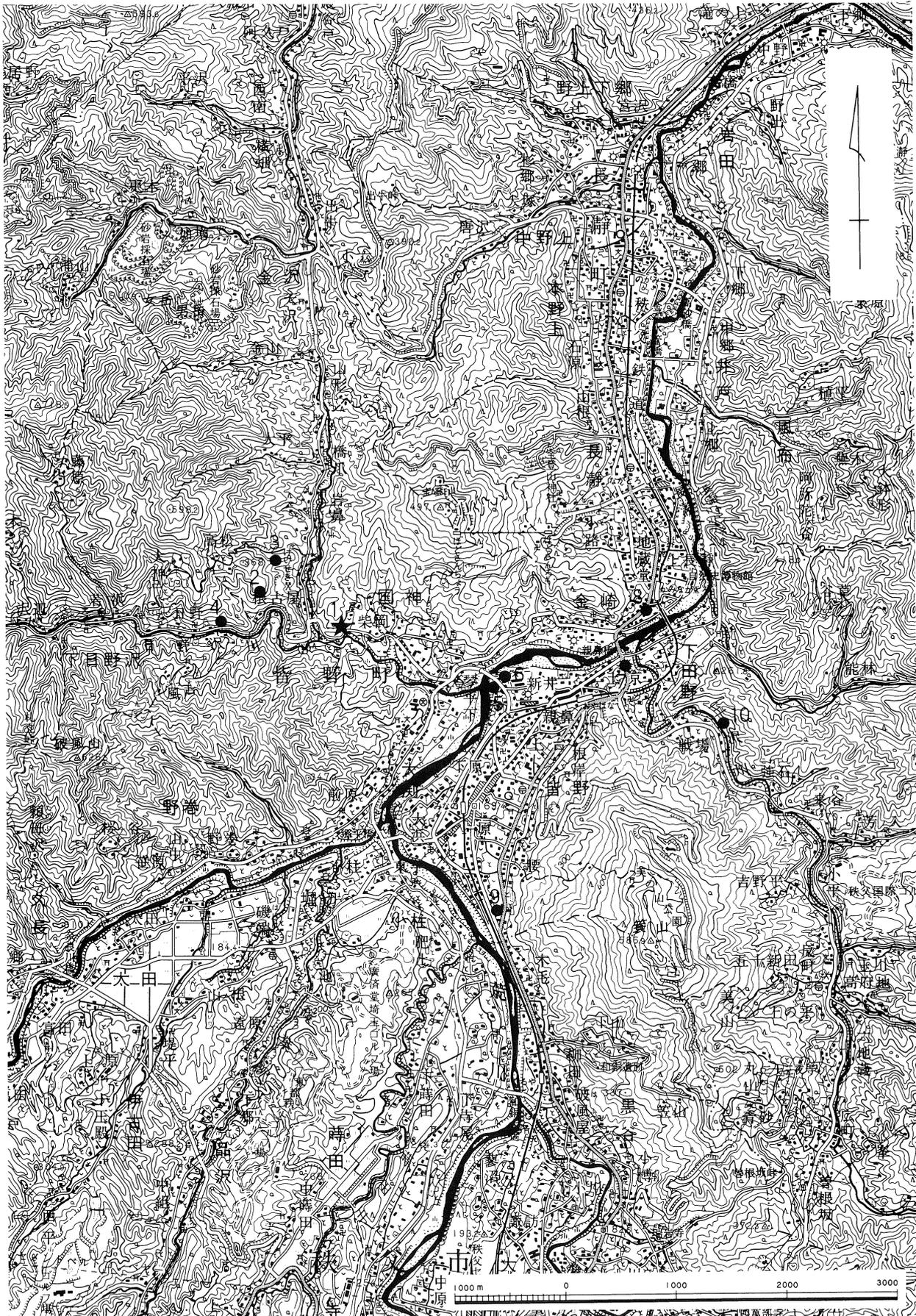
オープンサイトは、吉丸遺跡が1984年に町教育委員会によって発掘調査が実施され、中期の住居跡と土壌を検出している。また、土壌の上部から打製石斧3点と磨製石斧1点が、刃部を揃えた状態で出土しているのは注目される。

駒形遺跡と大背戸遺跡は、発掘調査が複数実施されている。大背戸遺跡が知られるようになったのは古く、大正15(1926)年の大場磐雄「考古学上よりみたる秩父」の中に記載がある。発掘調査は昭和37年に実施され、縄文時代中期～後期の敷石住居等多くの遺構と遺物が検出された。駒形遺跡は1971・78・83年に調査され、大きな成果を挙げている。また、本年度も調査が実施されており、敷石住居跡等が多数検出されている。

古墳時代は、県の指定史跡となっている大塚古墳と金崎古墳群が著名である。大塚古墳は直径18m、高さ5mの円墳で、墳丘は円礫の葺石で覆われている。周溝と思われる窪みが、墳丘の北から西にかけてみられる。埋葬施設は、横穴式石室で南南西の方向に開口している。

金崎古墳群は、以前8基以上の円墳があったといわれているが、現在は墳丘及び埋葬施設が保存されているのは、大塚1号墳、2号墳、3号墳、天神塚古墳の

第2図 周辺の遺跡



第3図 遺跡周辺の地形



4基だけである。墳丘はいずれも径10数m、高さ2～3mで、天神塚古墳を除くと、径に対し墳丘が高い。葺石と周溝の有無は不詳である。石室が開口している大塚2号墳、3号墳、天神塚古墳とともに横穴式石室で、大塚2号墳、3号墳は当地域に多くみられる変成岩が用いられている。天神塚古墳は結晶片岩を用いた短冊形石室である。石室の開口方向は、大塚2号墳は南南西方向、大塚3号墳は南西方向、天神塚古墳は南西方向である。

妙音寺遺跡は従来、石垣で囲まれた平場や、石組み井戸が配される戦国時代の寺院跡と考えられていたが、1995年に当事業団が実施した発掘調査の結果、石垣や平場、供養塔群は確認したが、建物跡は検出されなかった。遺物は少ないため、戦国時代から江戸時代後期であると思われるが、それ以上の成果はなかった。一方、供養塔群の下層から発見された洞穴からは、弥生時代から縄文時代早期の文化層が検出され、複数の炉跡が見つまっている。遺物は土器・石器類以外に、縄文早期の屈葬人骨1体を含む動物骨類が出土してい

る。詳しくは現在整理中であり、本年度に報告書が刊行される予定である。

以上皆野町の遺跡を概観した。次に宮地墓地遺跡を見ると、町の埋蔵文化財包蔵地台帳によると、戦国時代で種別は墓となっており、遺物は板碑と記載されている。また、『埼玉の中世寺院跡』に旧大通院跡に関連すると思われていたが、今回の調査では、平場と溝は検出されたが、建物跡等は確認できず、遺物も近世のものがほとんどであった。本地域は近接して高松城跡、祥雲寺跡等、ぎぎゅう堂跡等の中世の遺跡が多くみられ、近世は青柳半洞窟遺跡、阿左美氏館跡等が存在する。本遺跡と何らかの関連が、今後明らかになると思われる。

第2図周辺の遺跡に掲載の遺跡

1. 宮地墓地遺跡、2. 高松城跡、3. 勝負沢岩陰遺跡、4. 三角穴半洞窟遺跡、5. 駒形遺跡、6. 大背戸遺跡、7. 吉丸遺跡、8. 金崎古墳群、9. 大塚古墳、10. 妙音寺遺跡

III 遺跡の概要

第5図 全体図

宮地墓地遺跡は、日野沢川の北岸の段丘上に位置し、標高は約183mである。

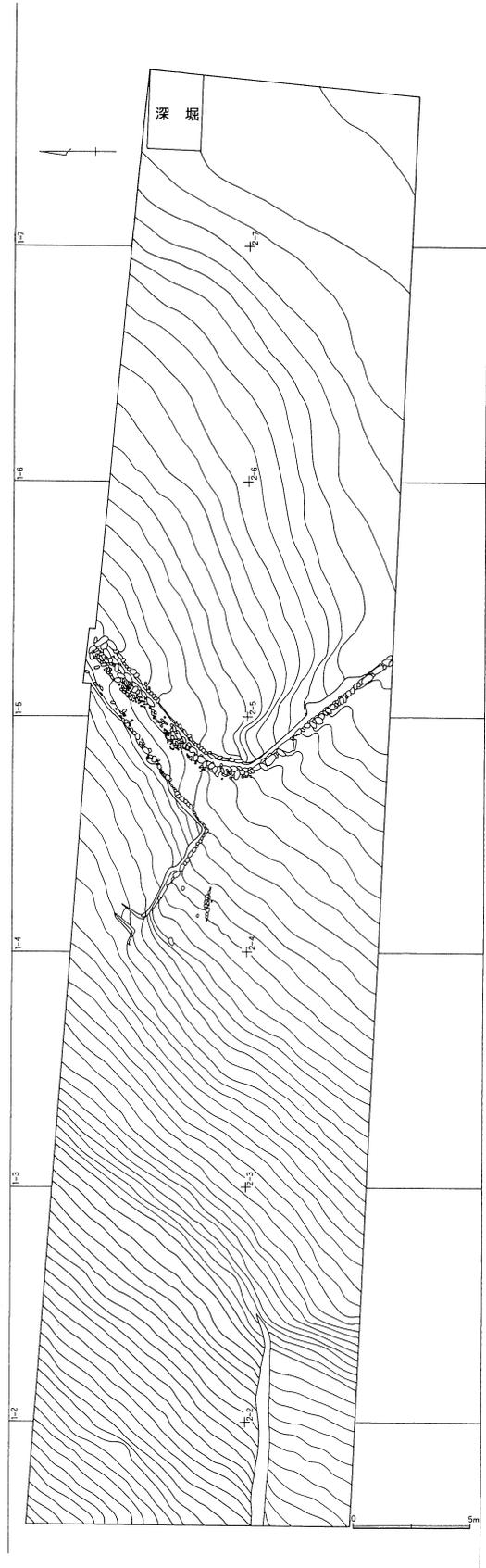
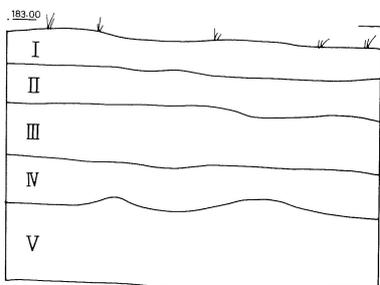
調査の結果、検出された遺構は、平場が3ヶ所と、石組溝2条である。第1号平場は調査区に対しL字状に、南西のコーナーが検出されている。周辺の石垣の残りは比較的良好である。第2号平場は第1号平場と第1号溝に挟まれた部分で、一部に径5cm大の礫が敷かれていたことから、当時は全体に石が敷かれていたと思われる。第3号平場は、石垣が部分的に残っているだけであった。

第1号石組溝は、第1号平場とほぼ平行し、平場のコーナー部分で90°逆方向に曲がっている。第2号石組溝は第1号溝が曲がった所からを示す。北側の石が抜かれているが、南側の石組みの遺存状態は良好である。

調査区の東側コーナーに深堀グリッドを設定し、基本土層を作成した。

- 第I層 表土耕作土
- 第II層 褐色混礫層 径2～3cm大の酸化小礫を含む
- 第III層 黄褐色混礫層 径2～3cm大の酸化小礫を含む
- 第IV層 褐色混礫層 人頭大の礫を多く含む
- 第V層 褐色砂礫層 径2～5cm大の小礫を主体として拳大の礫を含む

第4図 基本土層



IV 遺構と遺物

1. 平場

3ヶ所の平場が重複して検出された。全体の形状がわかるのは第1号平場のみで、良好な遺存状況とはいえない。同一地点で複数回にわたって平場が形成されていたことは、本地点が遺跡の形成にあたって良好な条件を満たしていたことが伺える。

第1号平場 (第6・7・11図)

東西方向の調査区に対し、L字状に検出された。平場としては最もよく残っている。北東方向の長い辺はN-52°-Eを示し、北西方向の短い辺との角度は107°と直角よりやや開いている。石垣の残存状況は、交点から北東方向に約7mまでは良好に残っており、その延長線上は石が散漫になる。しかし、一部調査区を拡張した部分にも石垣は続いており、調査区の外に延びている可能性は高い。調査時点の現況の観察から、約27m(15間)まで基壇状の高まりが見られる。北東方向の辺は、約3mまで石垣が残存しており、その延長には部分的に石が見られる程度であるが、基壇状の高まりは13~13.5m程度まで、延びている。

2. 石組溝

溝はL字状に曲がっている。北東方向の部分を第1号溝、北西方向を第2号溝とした。

第1号石組溝 (第6・7・11図)

本溝は第1号平場の北東辺とほぼ並行し、N-49°-Eである。長さは約8m。2mのコーナーをおいて第2号石組溝となる。溝の幅は10~15cm、深さは20~30cmである。

石組の状況は、北東の調査区限界近くに溝を塞ぐ様に、径60~70cmの楕円礫が置かれている。溝の内側には、止め石に平坦面を合わせる様に礫が敷かれている。溝は止め石で終わっており、それよりは延びないことが確認された。

止め石付近の東側面の石は、棒状の大形の礫と、小形の円礫を交互に組み合わせている。

石垣の積み方は、北東辺をAライン、北西辺をBラインとして観察する。Aラインは交点から約2.5mまでは、その延長ラインより約0.2m低く、30cm程度の石と小形の石を混ぜて密に積んでいる。また、Bラインも同様の傾向が見られそうである。Aラインは、その後はほぼ水平に石が積まれている。

第2号平場 (第6・7図)

第1号平場と第1号石組溝に挟まれてた範囲で、狭い所は約0.5m、広いところで約1.5mである。第1号溝の周辺に径5cm程度の礫がさも敷いたかの様に、多量に検出された。本来は全面に礫を敷いていた可能性が高い。

第3号平場 (第6・9図)

第1号平場の南東側に、現状で約1.6mの範囲に石垣が残存している。石垣の主軸はN-84°-Wで、第1号平場の北西方向の辺と31°で交差する。西側に炭化物が混じる範囲がありそこから遺物が比較的まとまって検出された。

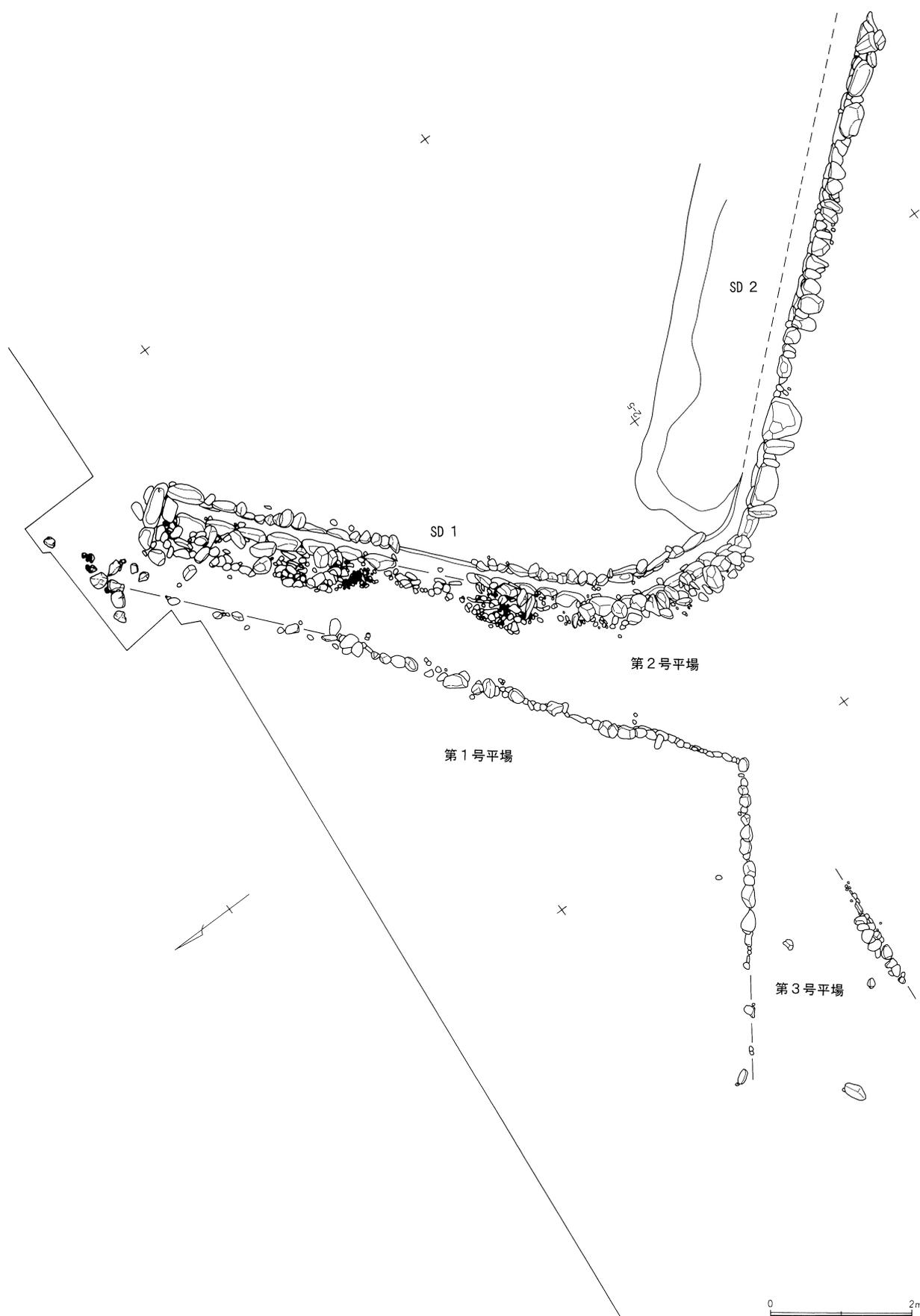
石組の状況は(第11図)、北から4、2、2mの単位がみられ、それぞれ約10cm幅で、階段状に下がっている。また、北側の4mの範囲は大形の石を立てている、中間の2mは小形の石を上下2段に組み合わせ、南側の2mは下段に小形の石、上段に大形の扁平な石が用いられている。

コーナーの部分は、同じ大きさの石を用いて、溝の内面に石の面を向けて、直線的に仕上げている。

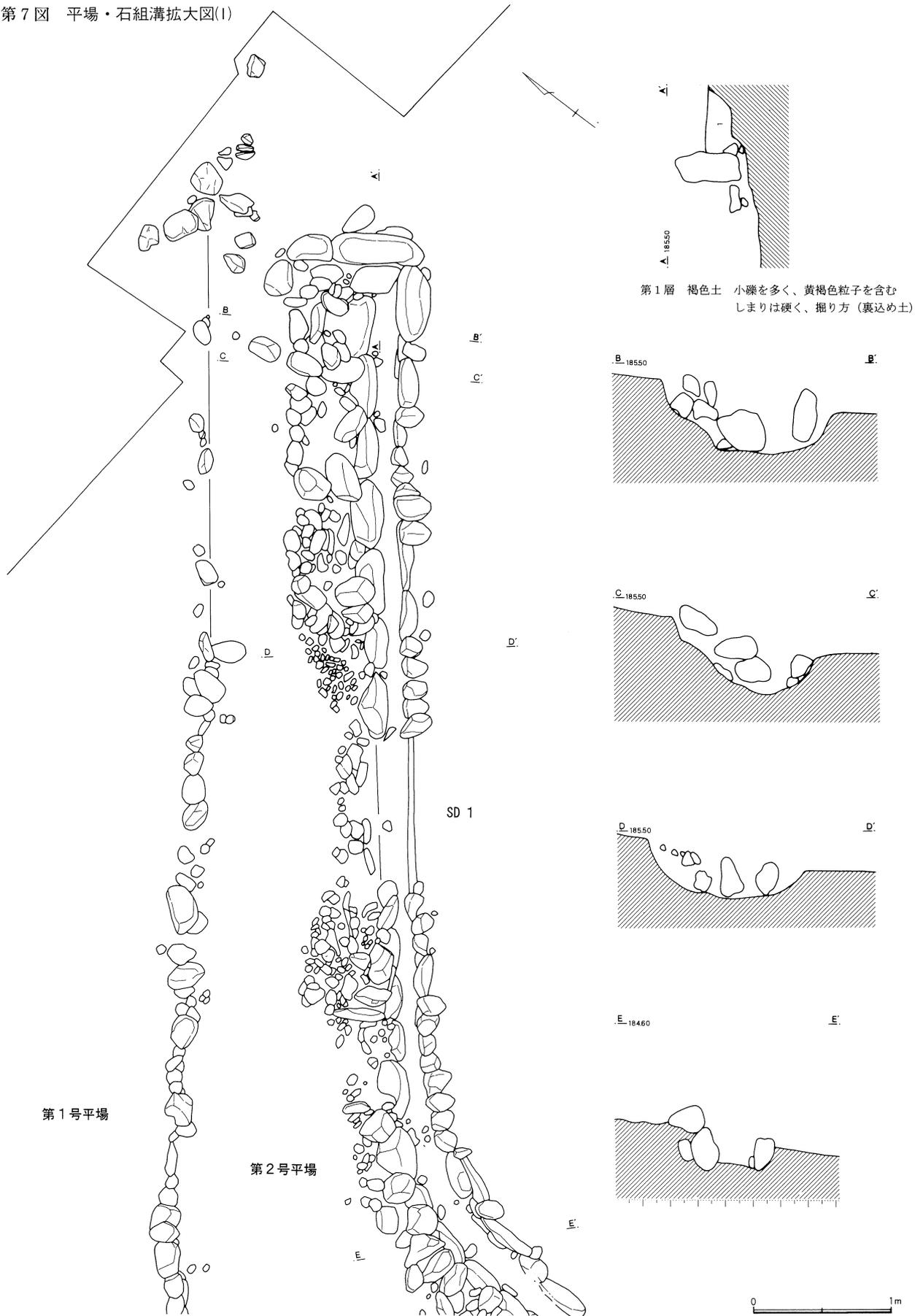
第2号石組溝 (第6・8・11図)

第1号石組溝とほぼ直角に、第1号平場とは逆方向に曲がっている。軸はN-39°-Wである。石の遺存状況は、北側の辺が大きく掘削され、石が全て抜き取られているが、南側の遺存状況は良好である。調査区に長さ約8mが検出されているが、現況で調査区の外に溝

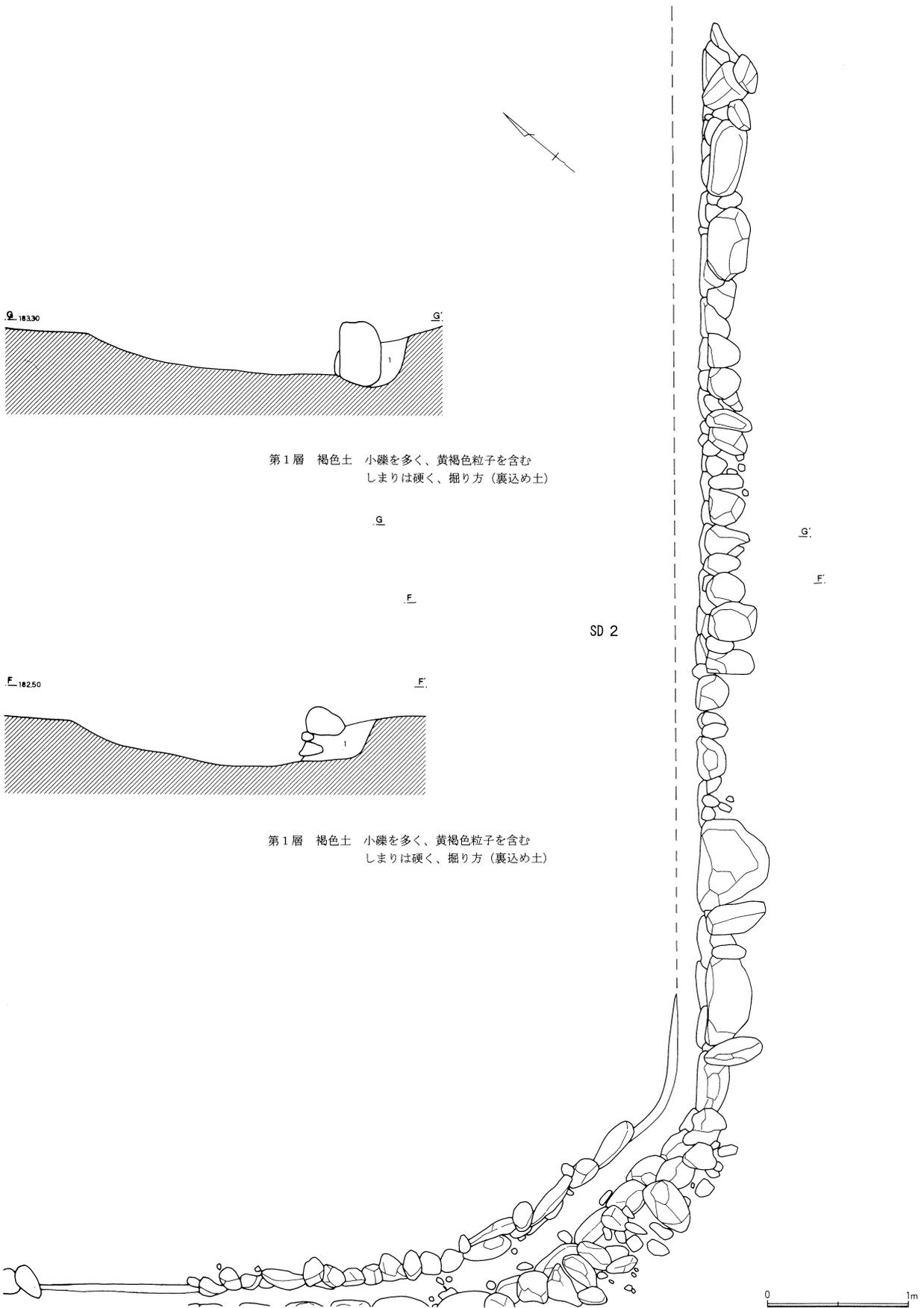
第6図 平場・石組溝



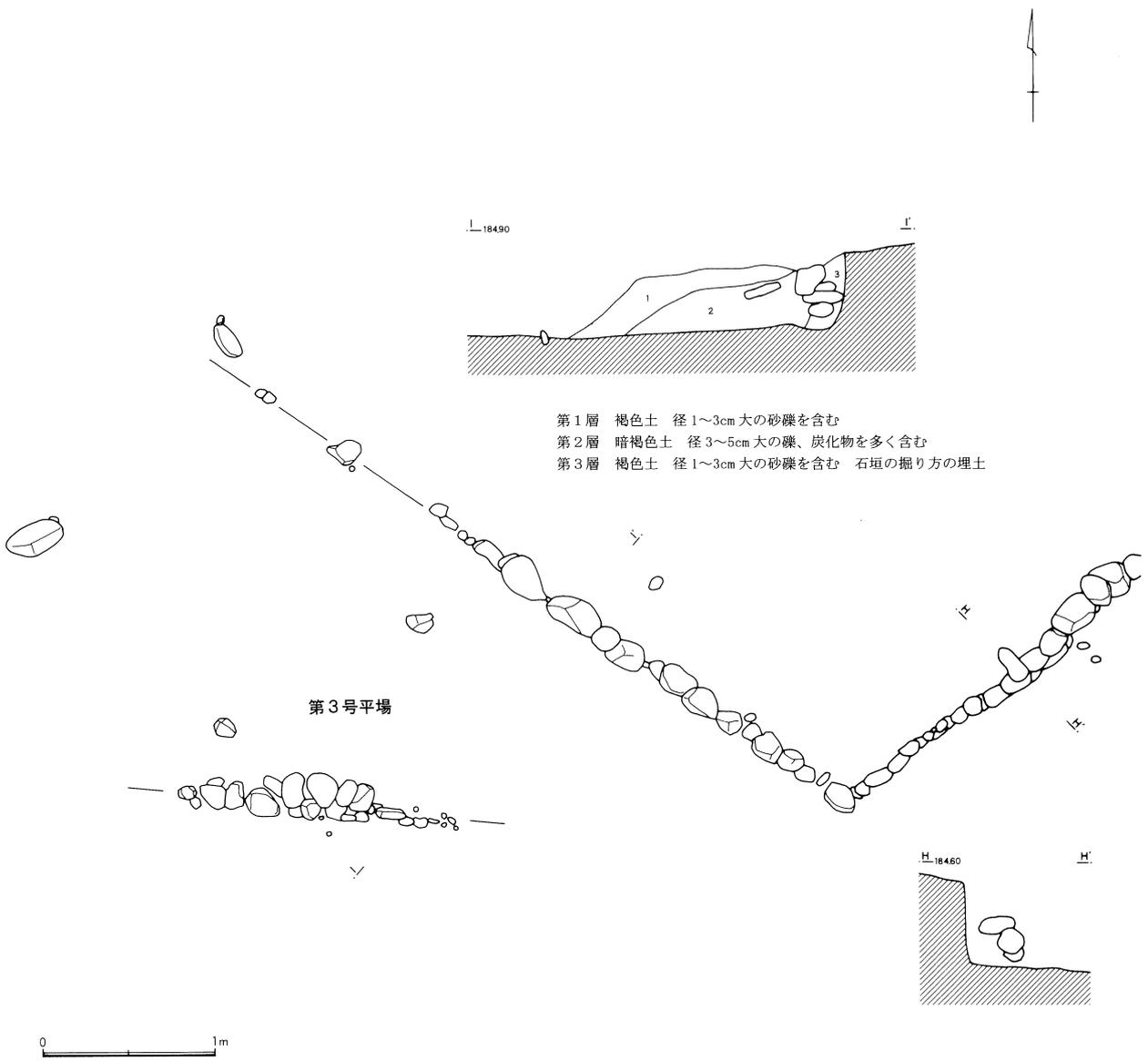
第7図 平場・石組溝拡大図(I)



第8図 平場・石組溝拡大図(2)



第9図 平場・石組溝拡大図(3)

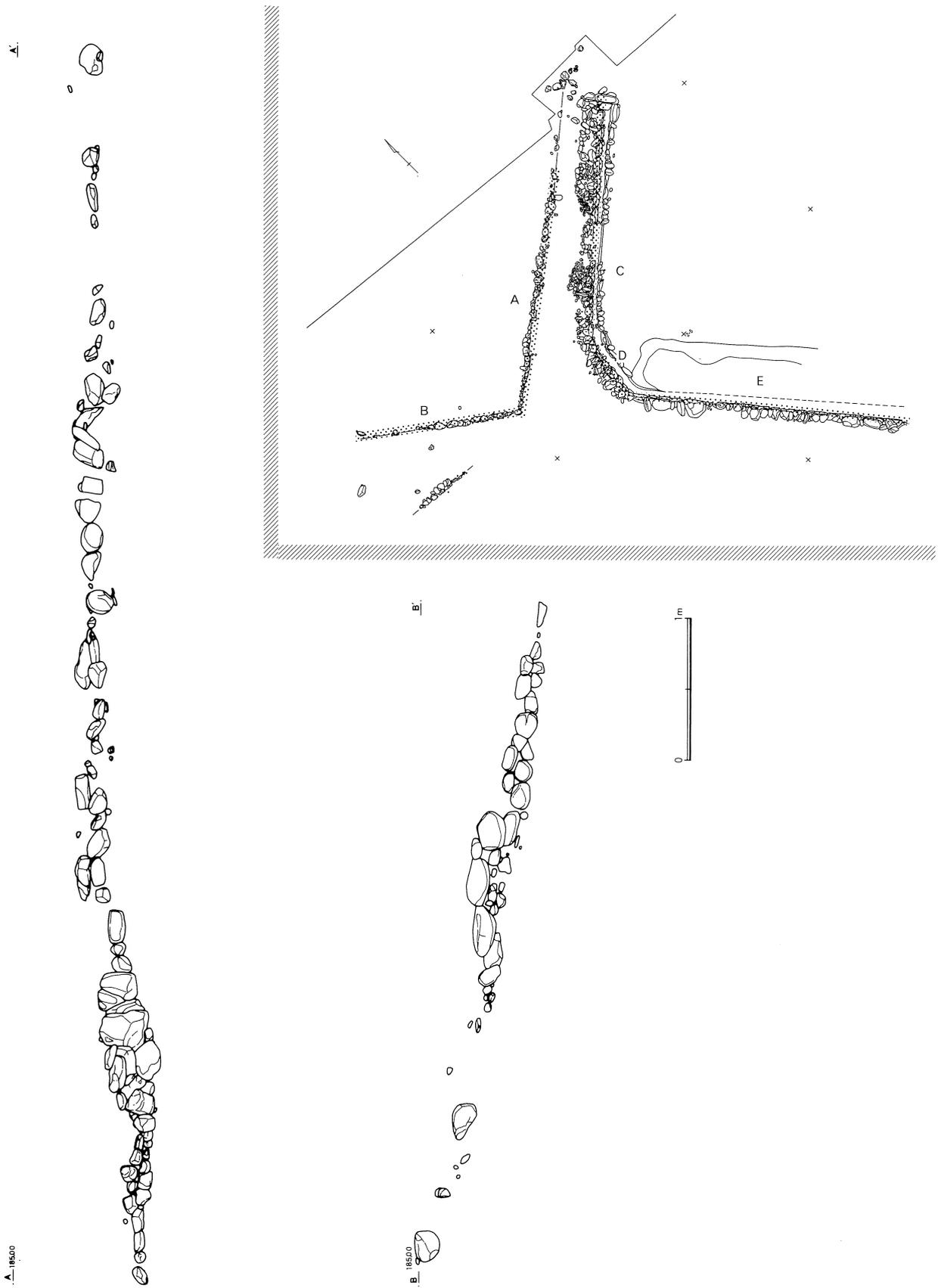


状の窪みが続いていることが確認できる。溝の幅は確認できないが、第1号石組溝と大きく変わることはないようである。

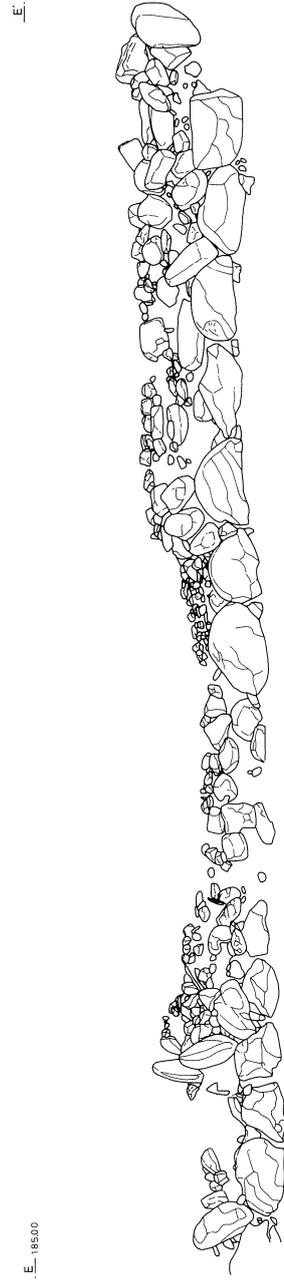
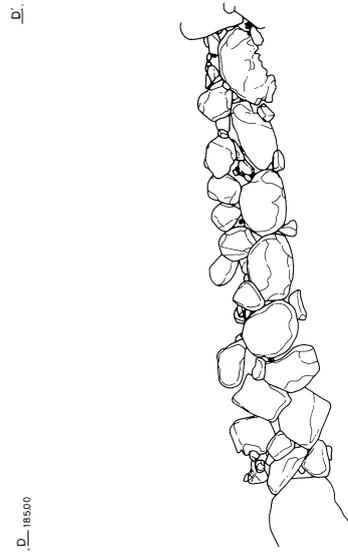
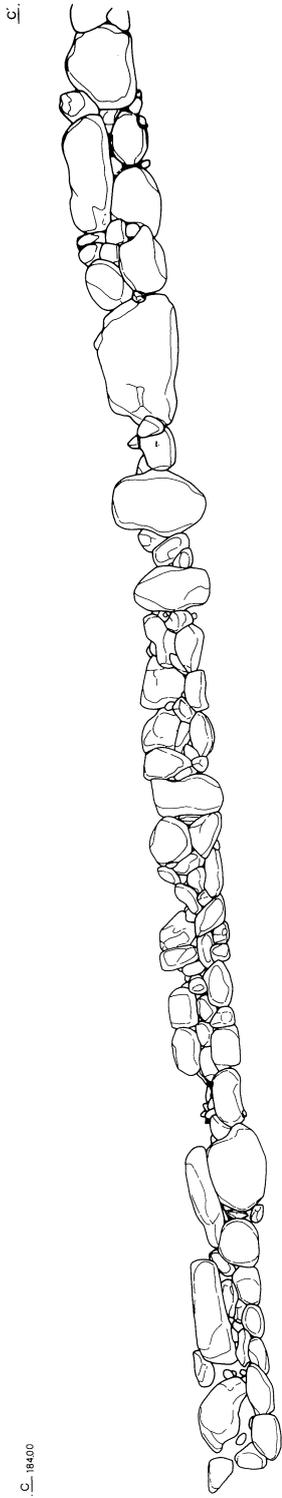
石垣の積み方は、大形の石を並べて、その上を小形

の礫で充填している。また、コーナーから約1mの地点から2mの幅は、大形の石が無く、中形から小形の礫をレンズ状に充填している。底面はほぼ平坦である。

第10図 石組の側面図(I)



第11図 石組の側面図(2)



3. 出土遺物

出土遺物は、平場と溝の覆土及び周辺から近世の陶磁器類が出土している。また、縄文時代のものと考えられる石器が見つまっている。しかし、遺物量としては少なく、まとまった形での説明が困難であるため、図示できたものを個別にみることにする。

陶磁器類 (第12図)

1は箱形湯呑。2～4は丸椀である。何れも残存率は低い。1・2は底部の破片。3は残存率30%で口径は11cm、器高は6cmである。4は口縁部を欠くが高台部分はほぼ残っている。残存率20%程である。

5・6は香炉。5は残存率30%。口径10.3cm、器高5.6cmである。6は残存率は20%程で、口径は推定で11.5cmである。茶色をベースに青色の釉が、器面上半分と裏面の口縁から2cm程度まで施釉されている。

7は陶磁器の花瓶。施釉は赤褐色で、内面にも施釉している。

8は皿の破片。口縁部が残っていないため、口径は不明である。

9は半胴。施釉は赤褐色が両面に施されている。口縁の残存率は25%で口径は推定で16.5cmである。

11は皿の口縁破片。同一個体と思われる小破片が多数出土しているが接合はしなかった。図版9上段参照。

12・13は播り鉢である。何れも小破片で全体の形状は不明である。

14は甕の胴部破片と思われる。

15～19は焙烙。残存率は全て10%未満であるため、口径は不明である。器高は計測できる15・16は6cm前後で、17・18もほぼ同じと思われる。

金属器類 (第13図)

20は鉄製の蓋。残存率は10%以下である。口径は推定で18.5cmである。

21は棒状の鉄製品、用途等は不明である。大きさは長さ13.8cm、幅3.3cm、厚さ2.3cmである。

22は筒状容器の底部または蓋の天井部と思われる。

口径は3.2cmで、周縁に幅1mm程度の接合の痕跡がみられる。また中央部に、外側に何かを取りつけたとも思われる穴があいており、扁平な留め金の一部が残っている。

23・24は鉄製の針金。23は径4mmの断面円形、24は径2mmの断面方形である。

ガラス玉 (第13図)

25はガラス小玉である。色調は白色に近い。玉の径は5mmで、穴は1mm程度である。側面形はおむすび状で高さは4mmである。所属する時期不明である。

古銭 (第13図)

26は寛永通宝。錆が進んでおり、拓本の銘は不鮮明である。

石器 (第13図)

27は打製石斧である。刃部を欠損するが、全体の形状は把握できる。外形は両側縁が平行し、刃部と基端部の約2/3の部分に浅い抉りが施され、基端は丸く仕上げられている。剥離加工は粗く、抉りの部分を除くと人為的加工なのか、節理で薄く割れた盤状の礫の形状そのものか、判然としない。

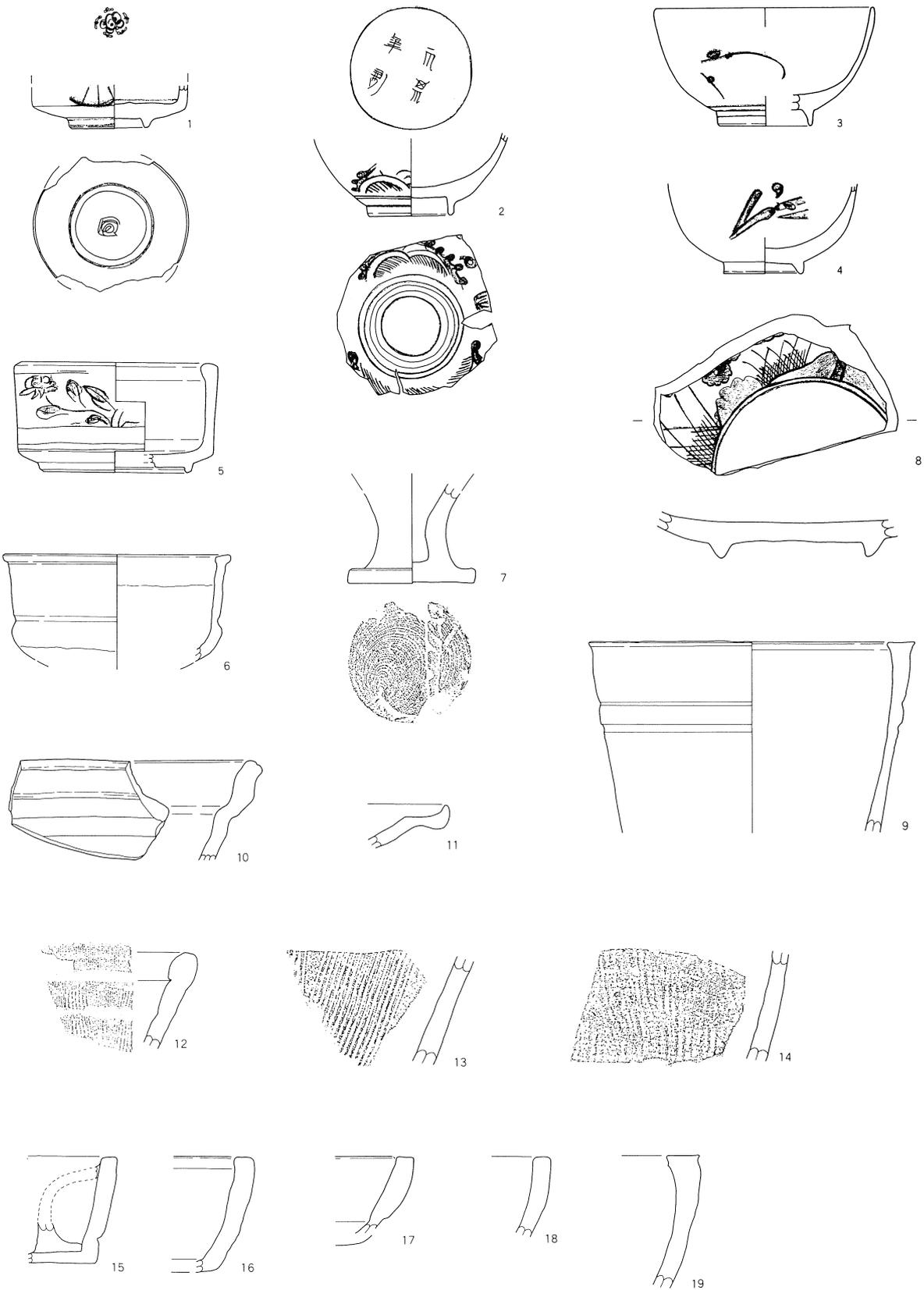
大きさは長さ17.7cm、幅7.8cm、厚さ2.3cmで重さは494.0gである。石材は本地域に最も多く見られる緑泥片岩が用いられている。

28は円形の薄い盤状礫が用いられている。右側縁の剥離面は何らかの加工と考えるよりか、使用によるものか、何れかの欠損と思われる。正面の原石面に磨耗痕がみられることから、磨石のような使われ方をしたと思われるが、帰属時期は不明である。

大きさは長さ9.6cm、幅7.7cm、厚さ1.2cmで重さは108.8gである。石材は緑泥片岩が使われている。

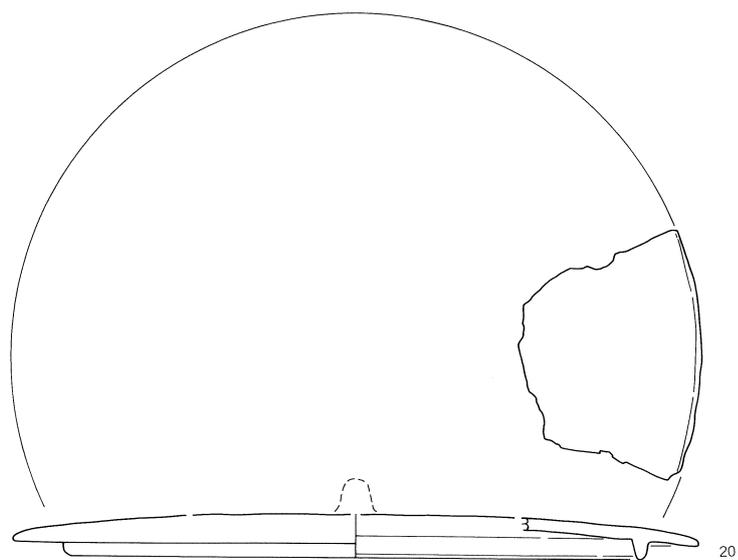
遺物の出土遺構は、16・18が第1号平場、1・2・5・7・9・20は第2号平場、19は第3号平場、6・11・17・22は第1号石組溝、3・10は第2号石組溝である。

第12図 出土遺物(I)

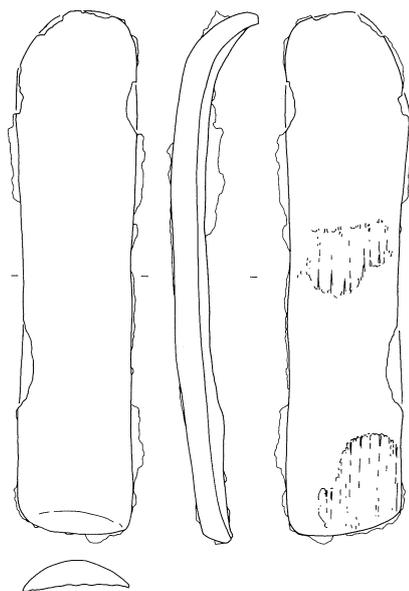


0 10cm

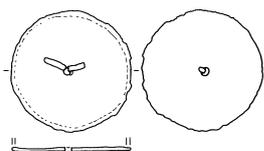
第13図 出土遺物(2)



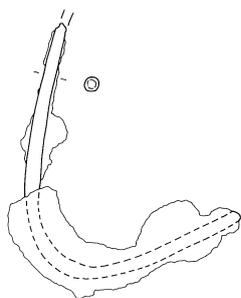
20



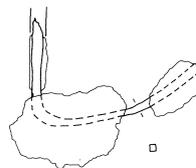
21



22



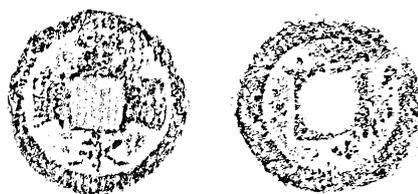
23



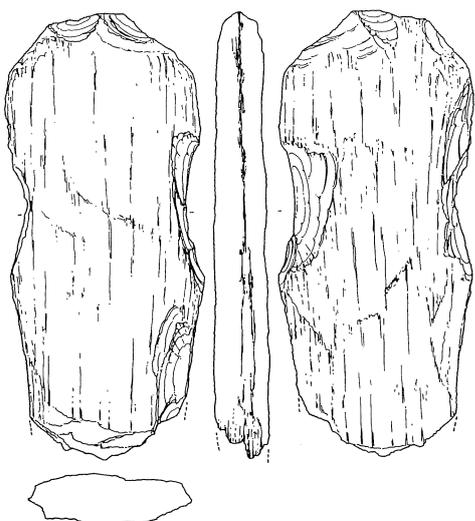
24



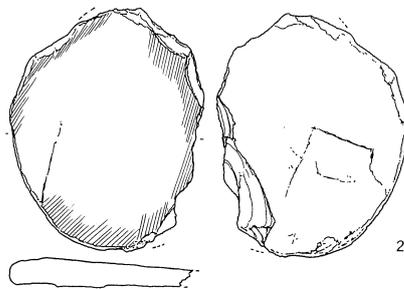
25



26



27



28



V まとめ

宮地墓地遺跡がある皆野町は、秩父盆地の北東部に当たり、町域の中央部南端で赤井川と合流した荒川が南北方向に流れている。町域の中央部では、東部に端を発した三沢川が南北に流れて荒川に合流し、西部に端を発した日野沢川は東西に流れ、荒川に合流している。また、中央部は荒川の低位段丘が発達し、標高150~180mであるが、その他は三沢川と日野沢川の河谷を除き、山の尾根に囲まれた地域となっている。そのため、遺跡が形成される地点もおのずと限定されている。

本地域は戦国時代、関東の小田原北条氏と甲斐の武田氏・上州の上杉氏の勢力が近接しており、鉢形城と近距離にあることから、高松城（6）、金沢城（18）、龍が谷城（38）、阿佐美氏館（7）、設楽氏館（20）等の山城及び館等が多く作られている。それら山城は中世後期鉢形城の出城とされている。

宮地墓地遺跡の西側に位置する高松城は、鉢形北条氏邦の臣逸見若狭守の居城で、本地域は逸見氏を中心とした、高松城衆として軍役をつとめたものと推定されている。その逸見氏は、甲斐国から移住してきたとされている。まさに隣国との境界地帯といった感じである。

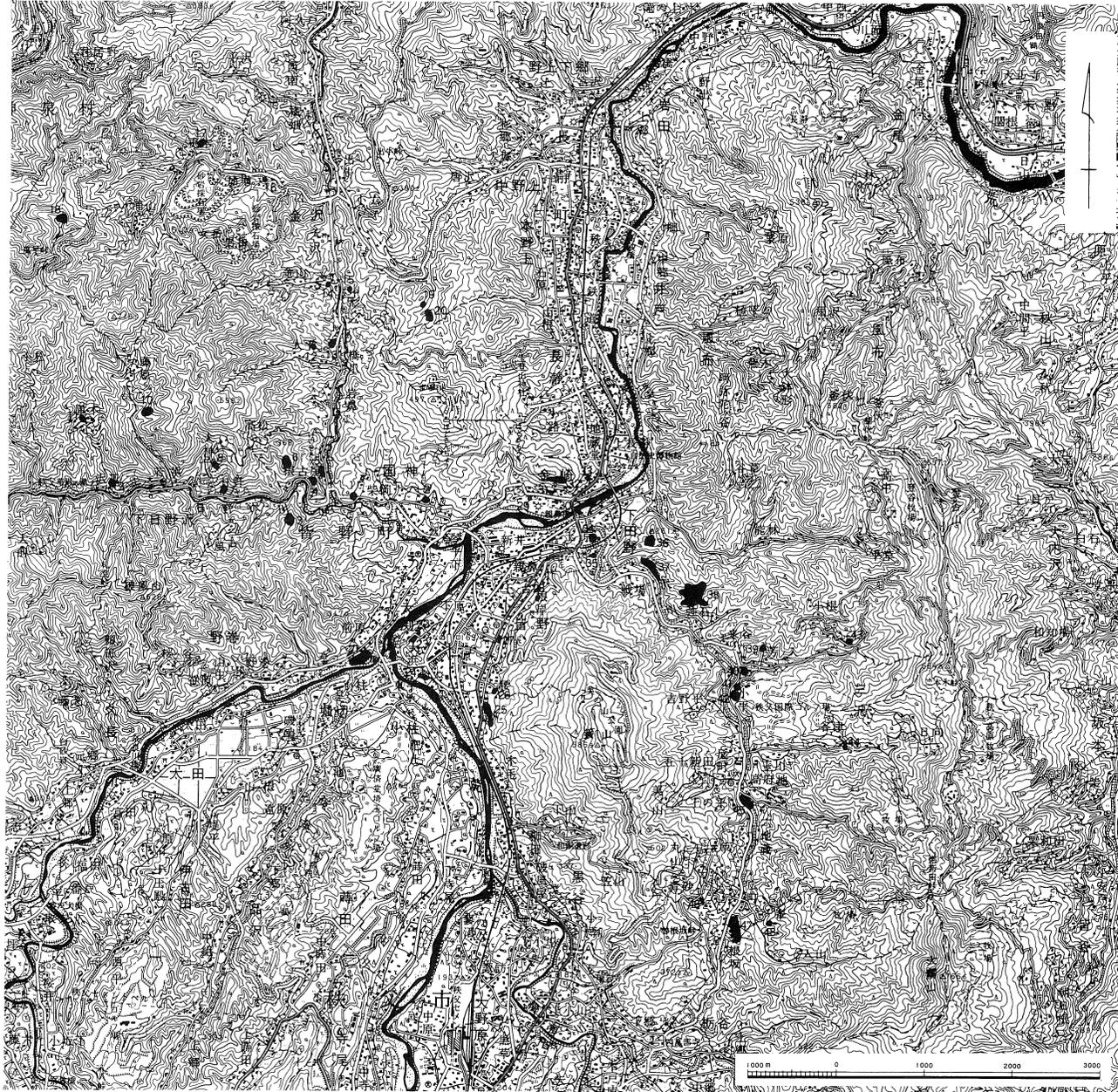
本地域は地形的特徴から、交通の要所として近・現代まで続いており、大淵を起点として、赤平川に沿って信州への道、金沢川に沿って上州への道が開かれている。特に上州道は秩父盆地内から旧中仙道に出る最短コースでもある。また、この幹線から分かれて日野沢川に入ると礼所祈願の第34播観音堂があり、旅籠屋が軒を並べていたとされている。

宮地墓地遺跡は、当初旧大通院跡との関連が考えられ、戦国時代の墓及び寺院跡関連の遺構が検出されると想定した。しかし、発掘調査の結果は、石垣のある平場3ヶ所と石組溝2条が検出されただけで、建物に関連する遺構はみつかっていない。また、遺物も少量出土しただけであった。そのため、近世の遺跡という以上、詳細を知る手掛かりがほとんど無い状況である。今後、近接し平場及び溝の続きの調査が進められれば、もう少し遺跡の性格が明らかになるとと思われる。当地域の歴史的・地理的位置づけや、本遺跡の地点等を加味すると、戦国時代~近世にかけて、幾度となく土地利用がされていたことは確かであり、それが寺院等に関連した場合もあったと思われる。いつれにしても、今後の調査が解明してくれることを期待する。

参考文献

- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1980 『角川日本地名大辞典 11 埼玉県』角川書店
菊池伸之 1992 『秩父・一貫目遺跡'91』皆野町教育委員会
菊池伸之 1993 『秩父・オリョウガイド遺跡'91 秩父・小池遺跡'92』皆野町教育委員会
菊池伸之 1993 『秩父・柳瀬古墳群第1号墳'91』皆野町教育委員会
菊池伸之・金子 款 1995 『秩父・下原遺跡'93』皆野町教育委員会
菊池伸之 1996 『秩父・親鼻遺跡'94 秩父・小池遺跡'95』皆野町教育委員会
埼玉県歴史資料館 1992 『埼玉の中世寺院跡』埼玉県教育委員会
皆野町誌編集委員会 1988 『皆野町誌 通史編』皆野町

第14図 皆野町の戦国時代から近世の遺跡

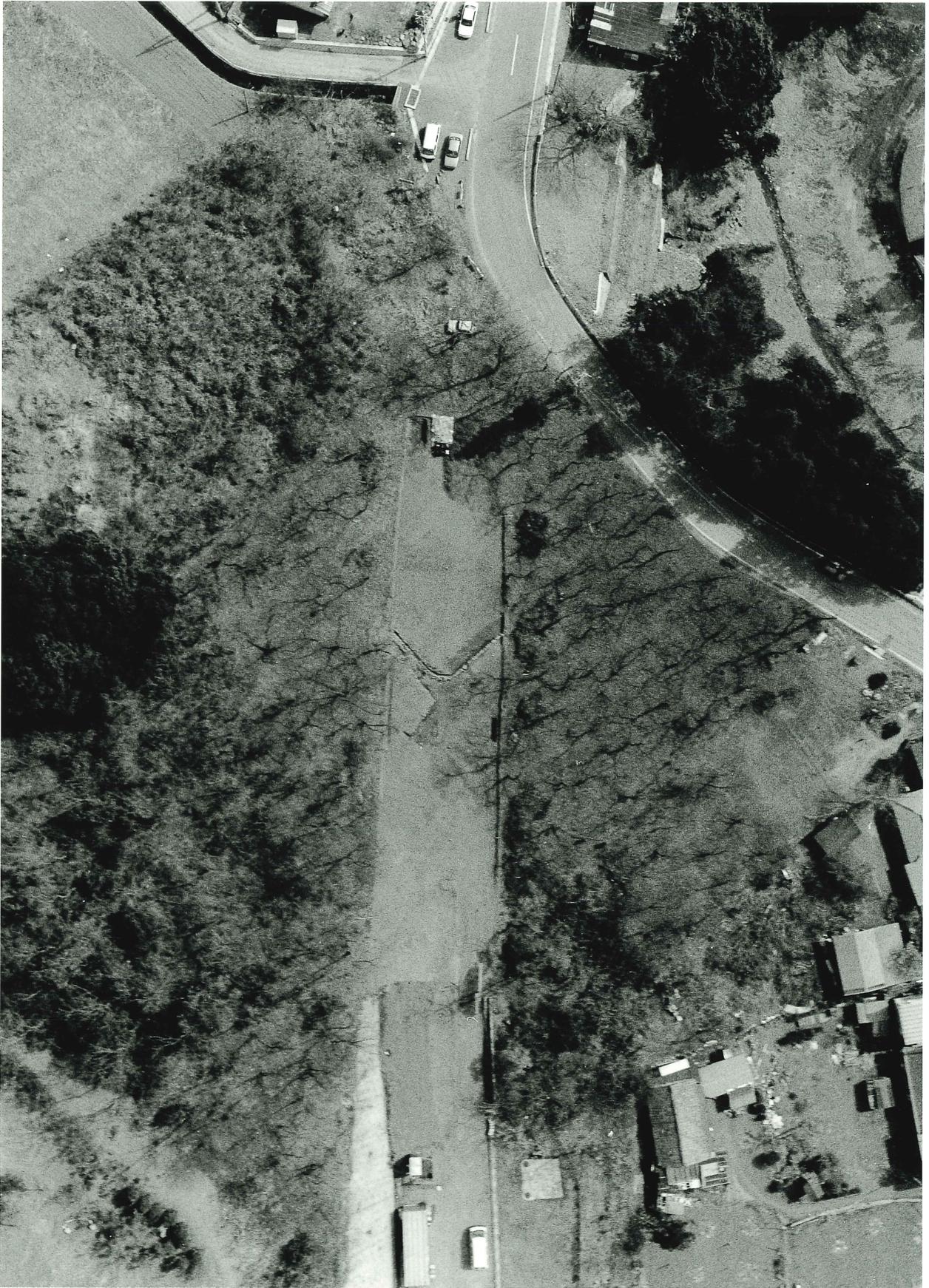


- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 宮地墓地遺跡 | 25. 小池氏館跡 |
| 2. 中割遺跡 | 26. 八幡山福王寺跡 |
| 3. 旗塚 | 27. 下中遺跡 |
| 4. 天神砦 | 28. 稻荷山稲福寺跡 |
| 5. 根古屋Ⅱ遺跡 | 29. 岩宮遺跡 |
| 6. 高松城跡 | 30. 金崎神社前遺跡 |
| 7. 阿佐美氏館跡 | 31. 長興寺前遺跡 |
| 8. 大龍寺跡 | 32. 根岸山砦跡 |
| 9. 宮寺院推定地 | 33. 大塚遺跡 |
| 10. 養命寺跡 | 34. 下土京遺跡 |
| 11. 良泉寺跡 | 35. 摩尼山延命寺跡 |
| 12. 青柳半洞窟遺跡 | 36. 田野城跡 |
| 13. 正法寺観音堂跡 | 37. 妙音寺跡 |
| 14. ぎぎゅう堂跡 | 38. 龍が谷城跡 |
| 15. 伝西光寺跡 | 39. 玉川氏館跡 |
| 16. 若林氏館跡 | 40. 芳ノ入遺跡 |
| 17. 祥雲寺跡 | 41. 小平Ⅰ遺跡 |
| 18. 金沢城跡 | 42. 小平Ⅱ遺跡 |
| 19. 小塚沢経塚 | 43. 薬師免遺跡 |
| 20. 設楽氏館跡 | 44. 玉川入経塚 |
| 21. 前原遺跡 | 45. 松葉遺跡 |
| 22. 宝珠寺跡 | 46. 丑沢経塚 |
| 23. 上和田遺跡 | 47. 坊谷戸遺跡 |
| 24. 内手遺跡 | 48. 森王山大泉院跡 |

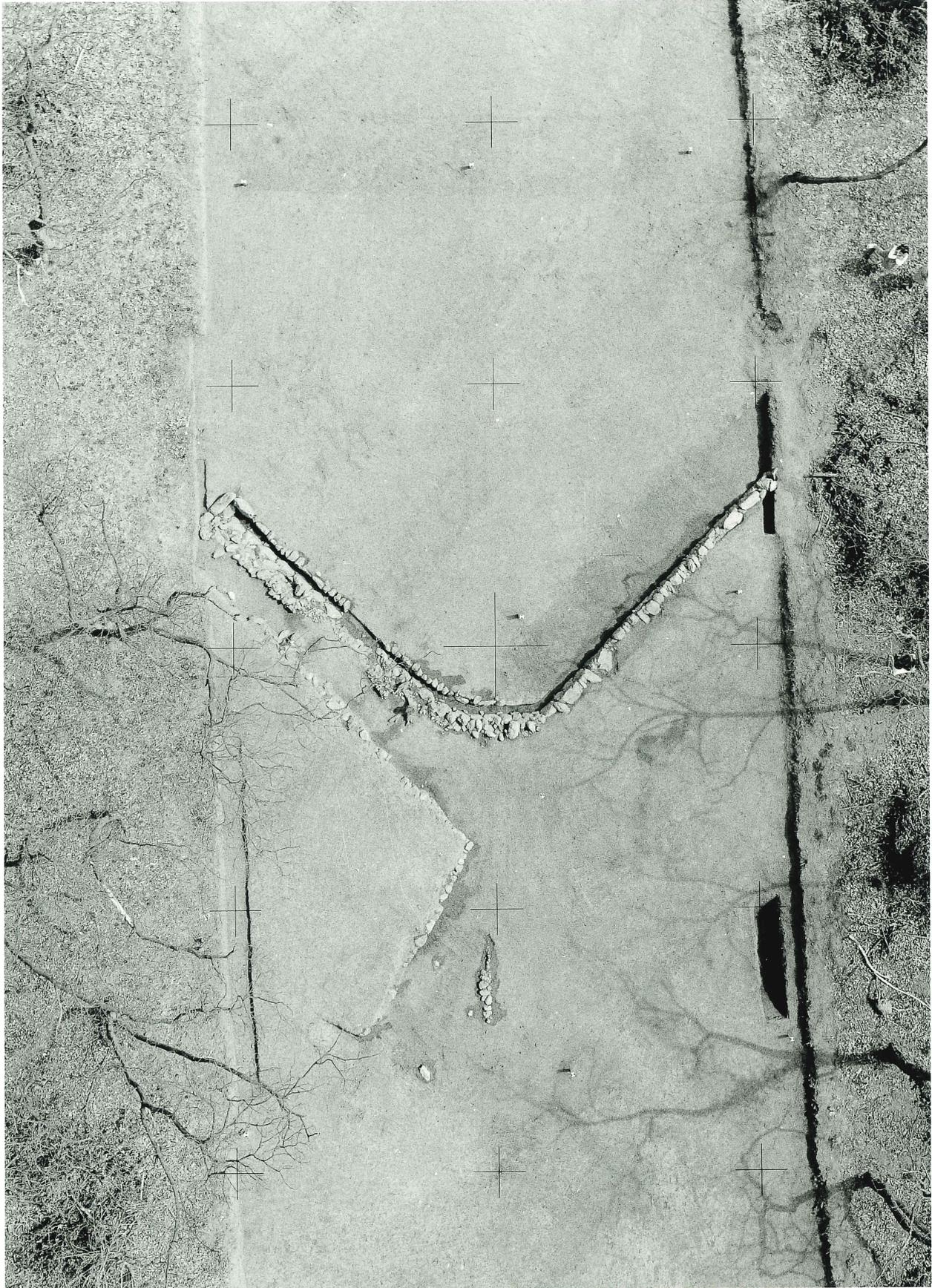
写真図版



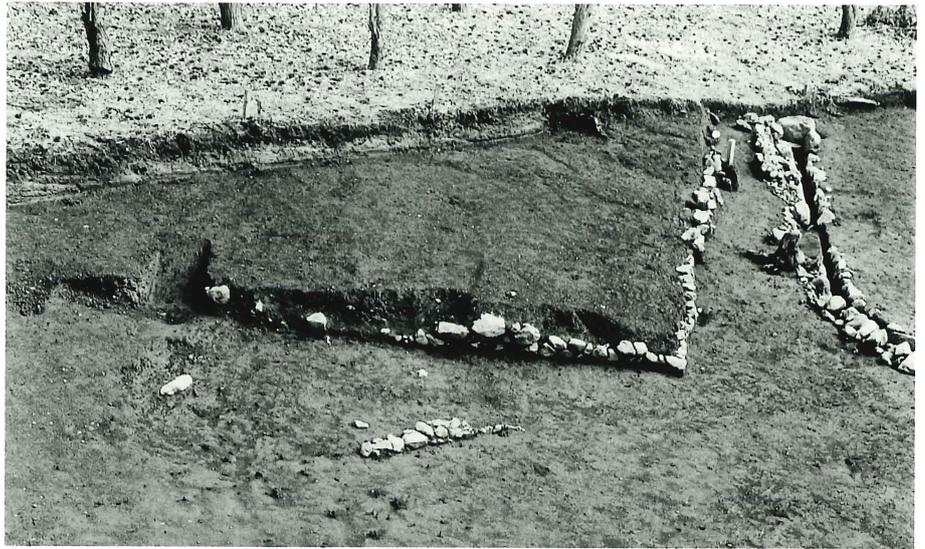
宮地墓地遺跡全景



宮地墓地遺跡全景



遺構全景



第1号平場、第1号溝



第1・3号平場



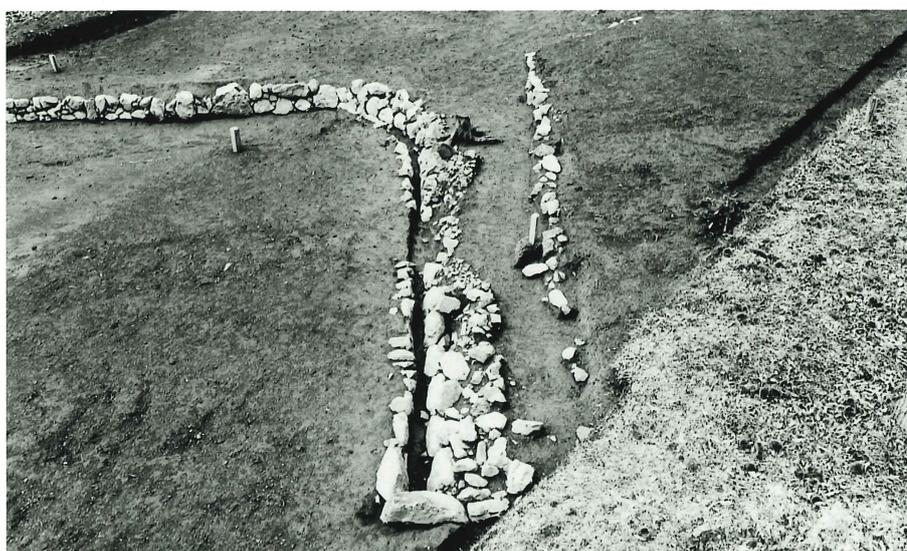
溝コーナー、第1・2号平場



第3号平場



第1・2号溝、第1・2号平場



第1号溝

第1号溝止め石



溝コーナー



第2号溝





第12図-3



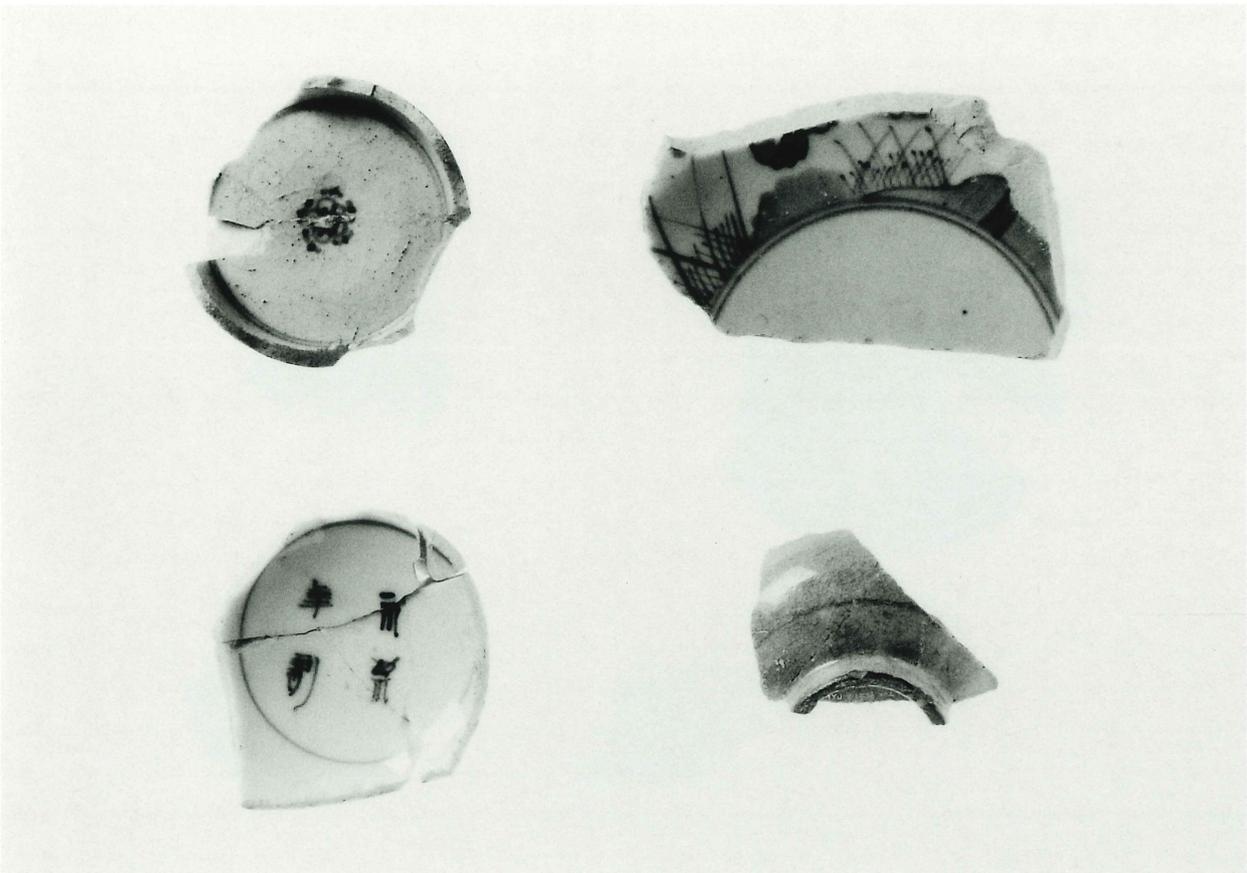
第12図-4



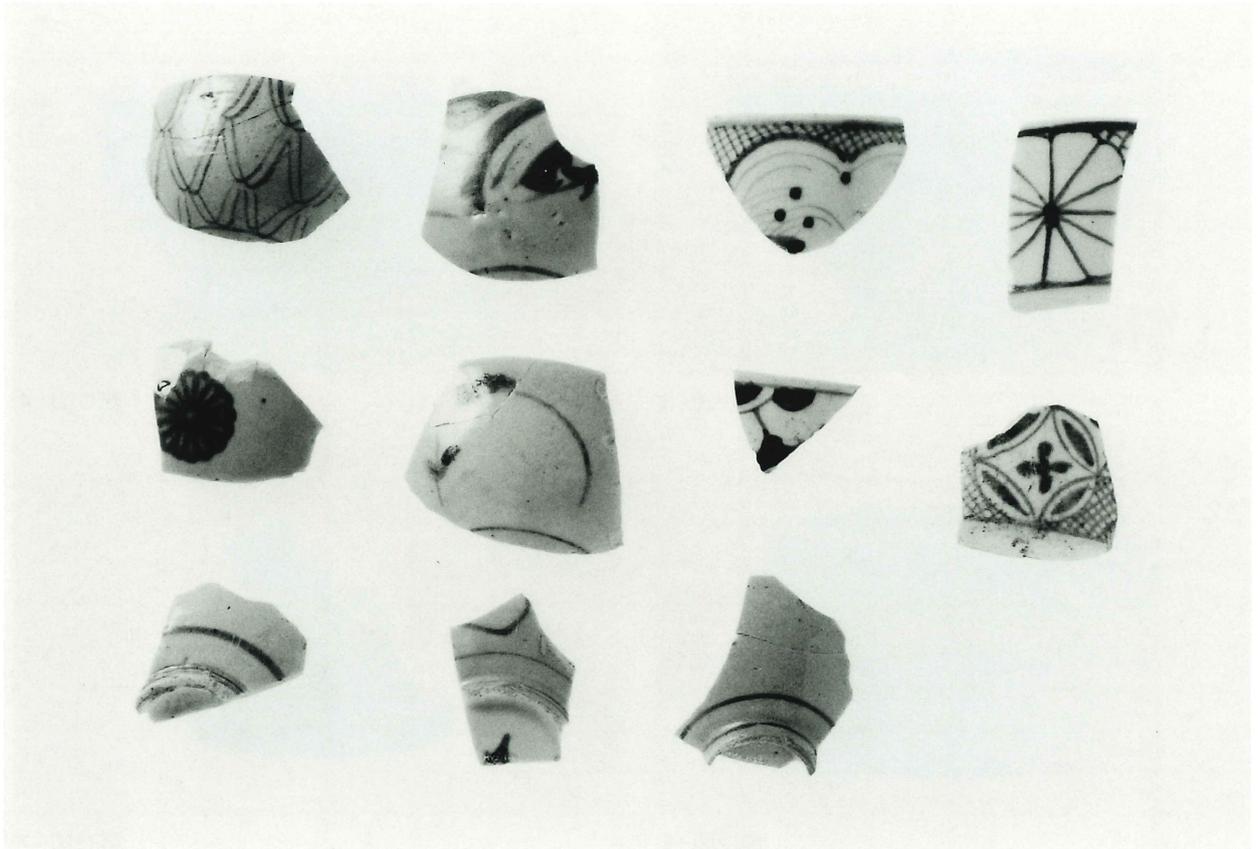
第12図-5



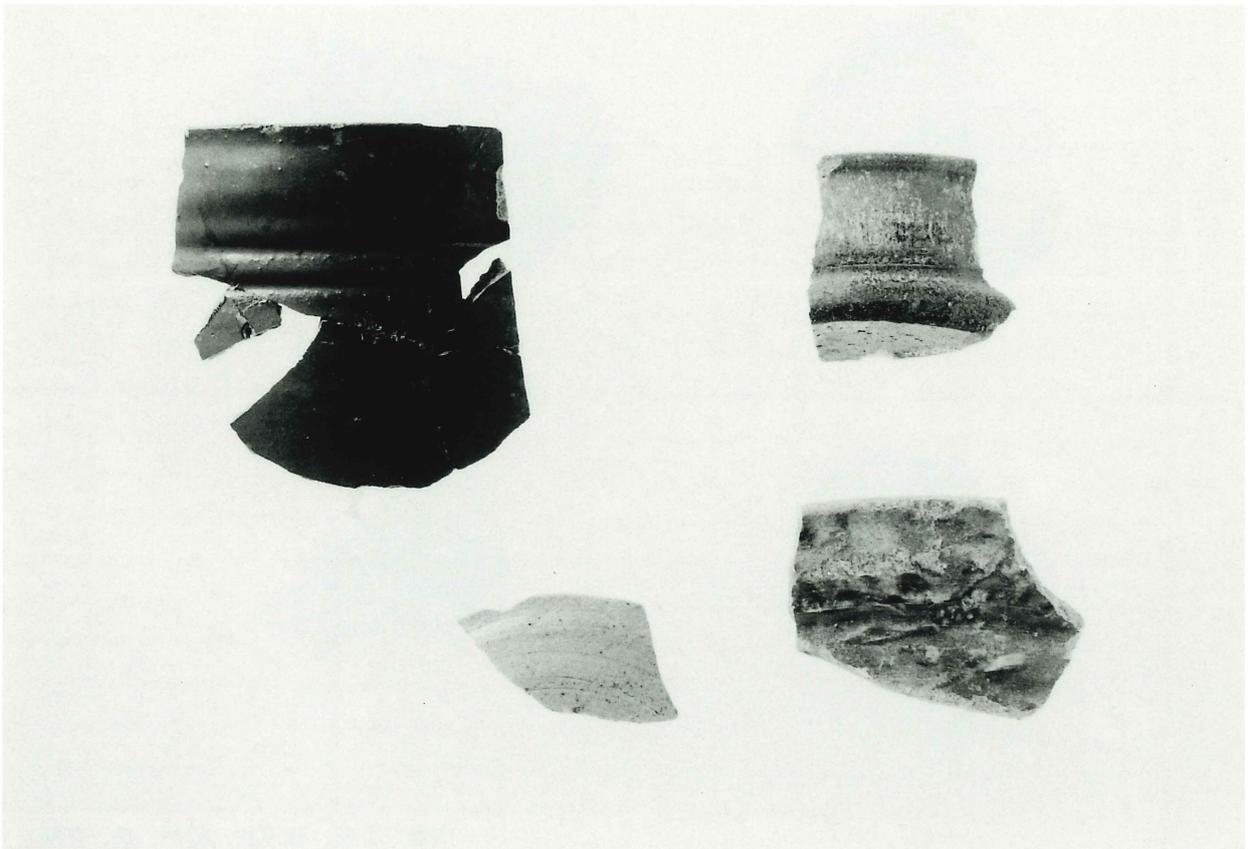
第12図-7



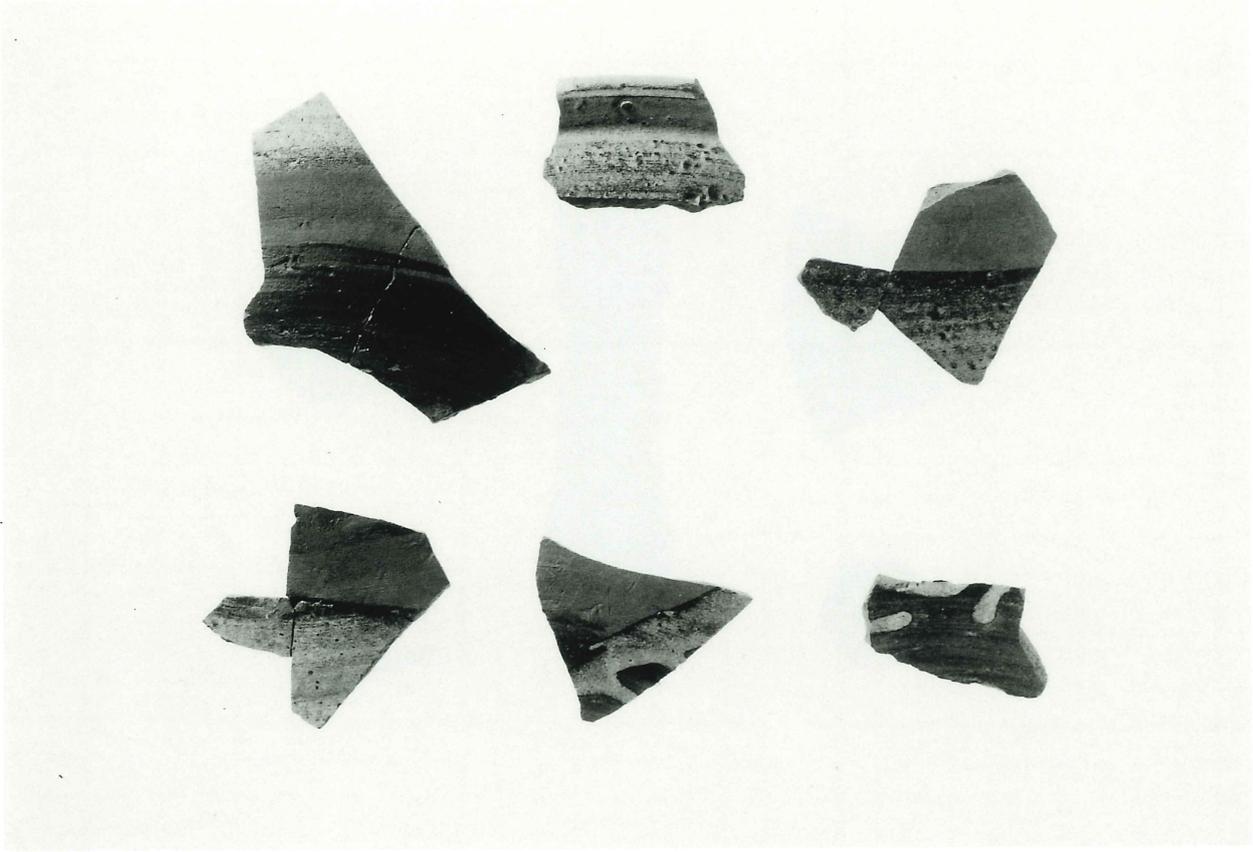
陶器（丸碗、箱湯呑、香炉、皿、花瓶）



陶器 (丸椀)



陶器類 (香炉、半胴他)



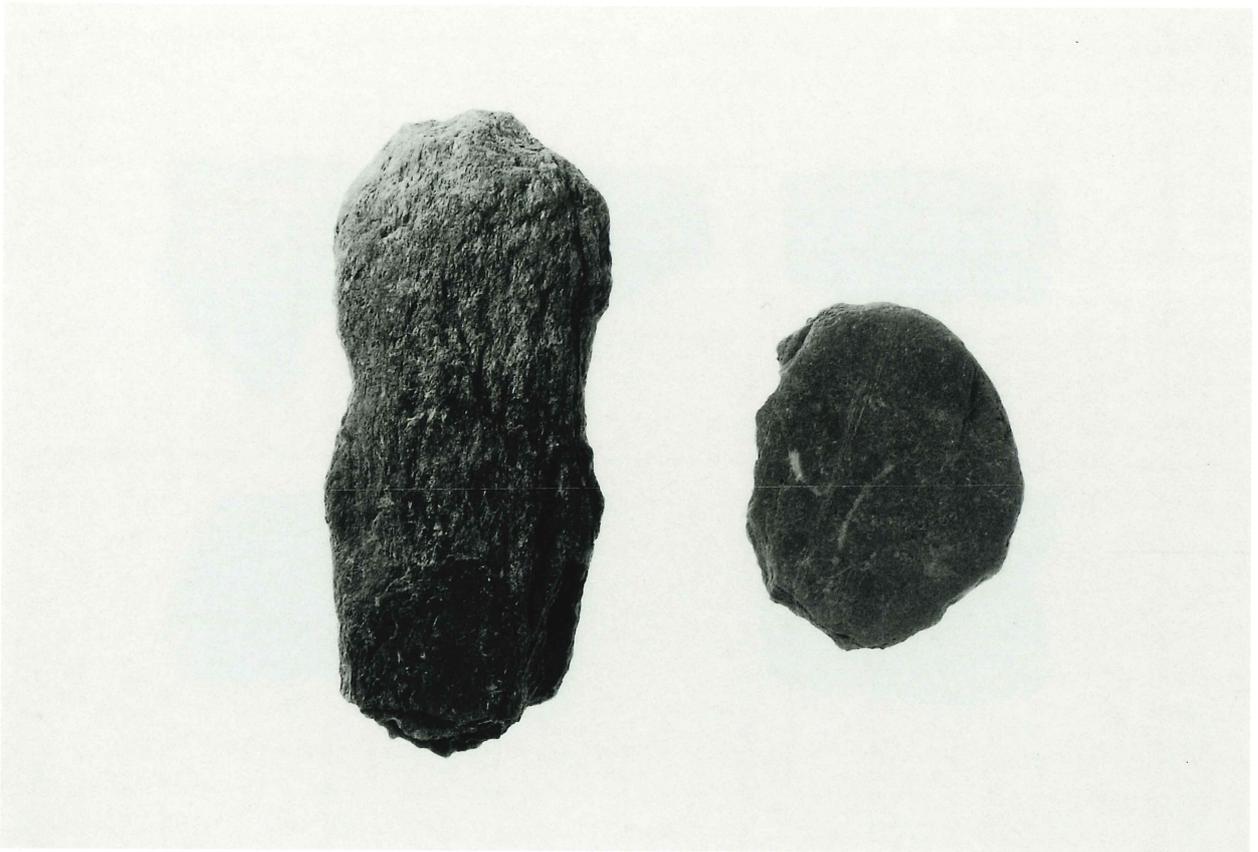
III



焙烙



鉄器



石器

報告書抄録

ふりがな	みやじぼちいせき							
書名	宮地墓地遺跡							
副題	県道秩父児玉線関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第210集							
編著者名	西井幸雄							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1						TEL0493-39-3955	
発行年月日	西暦1998(平成10)年8月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′			
みやじぼちいせき 宮地墓地遺跡	さいたまけんちちぶぐんみな 埼玉県秩父郡皆野 まちおおあざくにがみあざみやじ 町大字国神字宮地 ばんちほか 339番地3他	11362	164	36°05′08″	139°05′08″	19980301～ 19980331	700m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宮地墓地遺跡	その他	近世	平場3ヶ所 石組溝2条		陶磁器類 寛永通宝 鉄製蓋 打製石斧			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第210集

秩父郡皆野町

宮地墓地遺跡

県道秩父児玉線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

平成10年 8月20日 印刷

平成10年 8月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1
電話 0493 (39) 3955

印刷／朝日印刷工業株式会社